

平成23年度 海域の物質循環健全化計画三津湾地域検討委員会（第3回）

第2回検討委員会指摘事項に対する対応内容

委員名	指摘事項	対応内容
(2) 平成23年度秋季調査結果		
高橋委員	栄養塩の鉛直混合の可能性を検討するために、密度の鉛直分布についても図化してほしい。 呉や広島などは鉛直混合も小さいと思うので、そうしたところとの違いも考慮するとよい。	(地域WG事務局) 水温、塩分より密度を算出し、鉛直分布を図化した。→資料-1 p.14
安田委員	ナルトビエイによる食害について、カキが食害を受けたという報告事例はあるのか。	(地域WG事務局) 県漁連への聞き取り調査で、そのような話を伺っている。次年度の調査項目として検討する。→資料-3 p.6
山本委員長	ビデオを設置して、食害の要因とされる魚の行動を含めて把握するとよい。	(地域WG事務局) 了解した。→資料-3 p.6
山本委員長	p.20に記載された生態特性について、当該地域に当てはまらない記載(オキアミ類を採餌など)は、削除した方がよい。 また、珪藻を選択的に採餌する訳ではないと思うので、表現を再考すること。	(地域WG事務局) 了解した。
山本委員長	現地調査については、採取したサンプル量(m ²)や分析手法により解釈が異なるため、もう少し詳細にした方がよい。	(地域WG事務局) 資料中に、より詳細な調査手法を記述した。→資料-1 p.1
斉藤委員	ベントス調査でアサリは採取されたか。	(地域WG事務局) 今回の調査では採取されていない。
斉藤委員	採取されたベントスについて、富栄養または貧栄養海域に生息する種など、タイプ分けはできているか。	(地域WG事務局) “沿岸の環境圏：村上ら(1998,1999)”にある汚濁指標種に基づき、ベントスの出現状況を整理した。→資料-1 p.8
谷本委員	St.2とSt.6は、他の地点とベントス相が異なるとの結果だが、何が要因として考えられるか。	(地域WG事務局) St.2では、河口域に特徴的なエドガワミズゴマツボが多い。St.6は現時点で不明。底質環境と底生生物の出現状況の関係について整理した。 →資料-1 p.9
山本委員長	St.2は河口に砂がたまっており、周辺は泥ぼい環境となっている。調査地点が少なければ様子が変わるため、今後の調査では注意が必要である。	(地域WG事務局) 了解した。
山本委員長	p.16をみると、St.5の表層のみでアンモニアが検出されているが、何が要因として考えられるか。濃度は非常に低いので、問題はないと思うが。	(地域WG事務局) 現時点では不明である。
(3) 物質循環バランス向上のための方策について		
樽谷委員	2011年の秋は降水量が多く、瀬戸内海では特に窒素が高濃度で存在していたとされる。2011年の他海域のデータと三津湾の値を比べた上で、三津湾の栄養塩の状況を評価した方がよい。	(地域WG事務局) 了解した。
山本委員長	食害は物質循環と関係ない、というような説明があったが、生物の営みの中で起こる変化なので、物質循環のひとつに含めてよい。	(地域WG事務局) 了解した。→資料-2 p.3、資料-3 p.1
山本委員長	p.14の図は、インパクトとレスポンスの因果関係がわかりやすくなるよう、工夫してほしい。	(地域WG事務局) 現時点で推察される因果関係を整理したインパクト・レスポンスフローを作成した。→資料-3 p.1
山本委員長	物質循環のバランス向上のための方策のうち、No.12は、No.2と技術的にオーバーラップしているのではないか。	(地域WG事務局) 技術要素そのものは同じになるため、第3回委員会資料で整理した。→資料-3 p.9~11

委員名	指摘事項	対応内容
山本委員長	バランス向上のための方策を検討する際、実施するスケールの問題が大きく影響する。その検討は、もう少し先と考えてよいか。	(地域 WG 事務局) 現時点では不明な点も多いので、まずは考えられる技術を漏れなく挙げ、現地調査の結果やスケール等の費用対効果を踏まえ、現実的な方策に絞り込んでいく。
高橋委員	栄養塩の供給源として、陸域からの影響が大きいと考えられる。下水道や事業場からの負荷については、細かく押さえておいた方がよい。それにより、浄化センターの運用管理等による対策の可能性についても、検討することができる。	(地域 WG 事務局) 下水処理場は、平成 19～23 年度の、窒素、リンの形態別濃度（年度平均値）に関する情報がある。事業場は、代表的な特定施設 3 種についてのみ水質の実測値があるが、窒素、リンは T-N、T-P のみの測定ある。なお、陸域負荷の算定に際し、水質の実測値がない施設は、環境省の全国調査結果を原単位として用いた。→資料-2 p. 4
山本委員長	陸からの負荷について、T-N や T-P の測定値を形態別に分けるのは問題がある。測定が望ましいと思うが、調査計画に組み込むのは難しいか。	(地域 WG 事務局) 河川の窒素、リンの形態別の状況については、平成 8 年度まで公共用水域水質測定調査データが存在するが、以降は測定されていない。現地調査による把握が可能であり、次年度の調査項目として検討する。→資料-3 p. 7